

歩兵第五十四連隊（月兵団）

## 地獄の転進

岡山県 小林 元 春

——第十七師団（月）は中支から何時頃、南方へ転戦されたのですか。

私の入隊した歩兵第五十四連隊は、昭和十三年四月編成、七月に中国上海上陸、その後中支各地へ転戦したわけでありませう。

昭和十八年、ビスマルク群島進駐作戦が開始され、北部ソロモン地区の防備強化のため、北・中支にあつて作戦警備に任じていた歴戦師団である我が第十七師団は第八方面軍（司令官今村均大將）の戦闘序列に編入されました。

昭和十八年八月、南京を出発、十月船団を組んで上海を出帆、途中宮古島北方海上で敵潜水艦の攻撃を受け、僚船「栗田丸」は轟沈。その後も敵の雷撃を避け

るジグザグ航進で一時トラック島に避難中、B 24爆撃機の爆撃を受け多くの戦友が戦死戦傷。ようやくにしてニューギニア本島の北東、ニューブリテン島へ進駐し、島内主要各地の守備に任じておりました。

昭和十九年二月、我が連合艦隊の基地であるトラック島が連合軍の大空襲を受けました。このため中部太平洋方面の戦況は悪化し、ニューブリテン島の最大拠点であるラバウル周辺の海上輸送は全部途絶した。制空権は完全に連合軍に握られ、島内各地に対する補給は大発船による輸送さえ困難な事態となりました。陸上は海岸線まで、すべてジャングルに覆われ、陸上輸送も不可能でした。

昭和十九年二月、第八方面軍は各地区駐留部隊に対し、戦闘を継続しながら逐次ラバウルに後退する命令を発した。このため各部隊は海空の敵と対峙しつつ転進を開始しました。

我が部隊、中隊はニューブリテン進駐以来戦闘・警備に任じており、特に三月六日未明、敵は、空襲と艦砲の一斉射撃のもと、我が守備中のタラセア半島に上

陸を開始、これらの激戦で多数の犠牲を出したのです。しかし、ここでは、その後の我が第一中隊の転進時の惨状につきお話をいたしたい。

### 地獄の撤退行

タラセア半島は、ニューブリテン島中央の南海岸にある同島でも大きな半島である。この戦場で戦死された戦友をしのびながら、三月下旬から幾つかの集団となって、「ガブブ」を出発しました。しかし、同地野戦病院の病舎には死寸前の将兵が未だに多く残っていたが、我々には救護、搬送の力も無い、如何ともし難い状態である。そのため、これ等の戦友に後髪を引かれ、申し訳無しと思ひながら別れを告げなければなりませんでした。

ニューブリテン島における転進程悲惨なものはあるまい。生地獄とは、まさにあのようなものであろうか。狐が通る山道を、或いは獣も通れぬ大ジャングル、敵機の銃爆撃と、野蛮な現地人の襲撃を受けながら、延べ四百キロ余を、飲まず喰わずで歩いたあの転進行であります。

傷ついた将兵が三々五々自力で行くが、足を負傷して歩けない者は遠いながら、あるいは二人で肩を組みながら戦場を去っていきました。途中、川は大雨で渡ることが出来ず、「今はこれまで」と決心した数十名は、思い思いに手榴弾で自決して行く。

それらの死体の腐敗は早く、ものすごい悪臭を放っていた。夜ともなれば、青白い火の玉があちこちと飛び回る。我々がとぼとぼと歩く足先に引っ掛かるものは、ゴロゴロとした遺体で、それによるめく。よろめいて手をつけば腐敗した遺体に手先が入り込む。誠に悲惨極まり無いことでした。

毎日降る雨の中、泥にまみれての行軍のため靴は破れ、服は千切れ、縋れをまとい素足で歩く。また、末期の水をとりつつ息絶えたのか、水の中に首を突っ込んだままの遺体が、必ず渡河点で見受けられた。大きな川は南方特有のスコールで渡ることが出来ず、残された体力に自分の死期を知ったのか、諦めて自決して行く者。

また、川の中を渡りきれず、急流に足を取られ下流

へ流されてゆく者。そして鰐の餌食になる者。対岸に待ち伏せしていた現地土人の銃撃により、渡河中に死亡する者など、一つの川を渡るとは相当に難事でありました。

途中「地獄谷」と称せられた有名な難所がある。土人の襲撃によるものか、将兵が折り重なって、まさに死屍累々であった。土人部落で丸焼きにされて薄茶色に焦げた二つの遺体を見た時は、人喰い人種の仕業かと、背筋の寒くなるのを覚えた。

転進者は水虫に足をやられ、また足の裏がはれて歩行困難となり、加えて栄養失調、悪性マラリア、アメルバー赤痢、熱帯潰瘍、毒草による中毒等々で次第に衰弱し、一度落伍すればもう二度と追いつけませんでした。

一緒に枕を並べた兵に、僅かな食物を夜半ひそかに持ち逃げされた者、眠っている兵を死んでいると思つて靴を脱がし始め、帯剣で刺された者もいたと聞かされた。これが、かつて軍律厳しい軍人の成れの果てかと思ひながらも、今や何を聞いても驚かなくなった自

分に慄然としました。

このようにして、数多くの将兵の遺体が転進者の道標となり、死体の悪臭も気にならず、我々は無神経、無感動のまま「ウバイ」から「ウラモア」へと進んだのです。

将校も下士官も兵も、階級の区別とてなく、己が身一つを頼りにして餓と戦い、悪疫に悩みながら、腰までつかぬ泥濘の道を、残した多くの戦友を振り返りながら、二本の足と、杖で歩き続けました。

転進者の服装は、帯剣と飯盒、竹筒の水筒、杖であるが、ほとんど何も持っていない兵もいる。傷と食糧不足と長途の疲労で、次から次へと落伍してゆく。

転進中、数十名の兵が裸で土人部落にいる。理由を尋ねると「到底帰れそうもないので土人になるつもりだ、酋長も親切だし」と言う。誘っても言うことを聞かない。

数十メートル離れた所に水がサラサラ流れているのにそこまで行けずに「兵隊さんお願いします」と言って渴に苦しんでいる兵もいる。

遺体はほとんど衣服を着ていない。多分死んでいる者の衣服を脱がしていくのであろうか。死んでいると思つて靴を脱がし始めると目を開いて「俺は未だ生きてるんだ、欲しかったら死んでから取れ」と言われて慌てて行った者もいると聞いています。

衣料以上に大切だったのが食糧と手榴弾であり、誰もが欲しがっている。若し生きられぬと考えた時は自決するためである。将校とその当番兵らしい者が向かい合つて自決している姿も見ました。

「ウバイ」部落を過ぎた坂道では、後方から撃たれた十名ばかりの遺体があつた。これは樹上から土人に撃たれたものらしい。また、道路のそばで、「ウーン、ウーン」とうなっている声が聞こえる。草を払いのけると、血だらけになった兵が右手の指を切られていた。聞くと「自分はもう動けず落伍した。私の指を切つてもらつて戦友に頼んだ、これで安心だ。きっと骨は家に帰れるだろう」と細々とした声で言った。なんと悲惨なことでありましよう。

道に迷つた兵が大きな川に出た。相談の上、川を下

ることにしたが、途中、一人が罎に足を噛まれて川に引き込まれた。残つた者はやつとのことでジャングルに逃げ込んだという。

しかし、生きていくため食糧不足は如何ともしがたく、とかげ、蛇、がまがえる、海岸のやどり等、見付け次第何でも食べた、木の実に数限り無く食べて、命をつなぎながら転進しました。

陸の兵だから、草むす屍として遺体を山野にさらすのは覚悟のうえだが、野辺の死に様を見られることをきらい、死期が近づいたことを知ると、道端の茂みに入つて行く者もある。なかには、そこまで行く気力も体力もなく、路傍にばったり倒れたままだったり、仮小屋の中に寝たまま永遠に帰らぬ人となつたのも数限りありません。

このように「ウバイ」からの帰路さえも、多いときには一日百余の遺体を見た。遠きは「ツルブ」の果てから八百キロも歩いて来た者が、精魂尽きて「ラバウル」を目前にして倒れていった。誠に悲しい限りでありました。

撤退経路上の最後の要点「シナップ」で、部隊の収容に任じていた野戦病院の山口軍医は七、八名の兵と共に転進兵の収容作業に出発したが、その状況を次の様に述べられていた。

「ランギス」から四キロ足らずの所の小さな土人部落近くまで行き、そこで土饅頭を盛って、遺体何体かを葬って引き返した。仰向いて天をにらみ、伏しては土を握り、或いは木の根にもたれて座ったまま息絶えた姿。凄愴とも無惨とも痛恨とも、何とも、私は言葉を知らない。百日を費やして百里の險阻、ジャングル、悪路を歩き続け、飢えと戦い、マラリアに苦しみ、下痢に悩み、疲労困憊の極、ついに「ラバウル」を間近に倒れていったのであろう、と。

このような「ニューブリテン」の生き地獄で戦って生還した私の感慨を述べて見ましょう。

ニューブリテン島の地獄の戦線から九死に一生を得て還り、そして日本軍の墓場と言われた、あの転進の生き残りの兵として訴える。

「恒久平和の確定と祖国日本の不滅を信じ、任務遂

行の完遂に努力したが、不幸にも戦場に散華し、病魔に斃れた亡き戦友は数多く、天運僅かにその時と所を異にしたのみで、彼我生死の立場をかえ、幽明を分けた。以来幾星霜を経て、期せずして生還の喜びを得た我々も、今更に亡き戦友と、その御遺族の上を偲ぶとき、ますます愛惜の情と、畏敬の念を禁じ得ず、心に深くその痛みを覚えるものであります。

人の一生は歴史という彫刻にきざみこまれてゆく。歴史のなかで常に大きな羽ばたきをのこすのが戦争であるという。こうして歴史は勝者の歴史の大きな流れである。敗者は常に黙して語らない。勝敗を問わず戦争を体験した人々は、生ける限り自らの体験を語り続ける。未経験者、未体験者がどのように感じようと、事實は事実であり、これを風化させることなく後世に語り伝えることが、我々戦争体験者の戦没戦友や御遺族と日本国に対する責務である。」というのが私の感慨であります。